

# 持続可能な未来社会を創造する主体を育成する外国語活動・外国語科の構想

## 外国語活動・外国語科で目指す資質・能力

同時翻訳機能の高度化やグローバル社会の進展が想定される未来社会においては、質の高いコミュニケーション能力や言語文化への深い理解が一層必要となる。そこで外国語活動・外国語科では、現行学習指導要領で目指す「コミュニケーションを図る基礎」に加え、他者とのコミュニケーションの基盤を形成する観点を重視し、創造的思考、感性・情緒等の育成を重視する。

具体的には、以下の3つの資質・能力の育成を目指す。

- 言語やその背景にある文化について理解し、実際のコミュニケーションにおいて目的や場面、状況等意味のある文脈に応じて自己の考えや気持ちを伝え合うことができる。  
【主に「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」に関わる創造性】
- 多様な言語（文化）や考えをもつ他者を、共感性をもって受容し、尊重し合うことができる。  
【主に「学びに向かう力・人間性等」に関わる協働性】
- 母語や外国語に対する自己の考えの変容を振り返り、コミュニケーションの価値を見いだすことができる。  
【主に「学びに向かう力・人間性等」に関わる省察性】

## 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とは、

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

である。この外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を児童が自在に働かせ、豊かで確かなものに高めていくためには、見方・考え方と資質・能力の関係を整理する必要があると考えた（図1）。



【図1 見方・考え方と資質・能力の整理】

このように見方・考え方を整理することで、本校外国語教育が目標とする資質・能力を一体として育成できると考える。

## 具体的構想

### 1 創造性の発揮を重視したカリキュラム構想

外国語活動・外国語科における、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方は図1で整理したように特に創造性と深く関係している。そこで、領域「話すこと」を中心に、文化への気付きまでをねらうカリキュラムを構想する。例えば第6学年では、学校紹介のプレゼンテーションから海外の方とのその場での交流、そして日本独自の文化の紹介を通して言語そのものを捉えることができるようにする。なお、学びの文脈としては、社会的・実用的な側面を重視しながらも、年間の後半では外国の文化について学びを深める、文化的側面に重点を移行していく。

令和5年度 年間指導計画 (一部抜粋)	5月	6月 夏休み	7月	9月	10月	11月 新年度	12月 年末
単元	This is my weekend. 休日の過ごし方	This is my school. 福岡小学校の魅力発信	I want to... 私が言葉を選ぶ理由	My summer vacation. 夏休みの思い出	We all live on the earth. ~守ろう美しい地球から	My school Memories.	日本の文化を広げよう ~HAIKUの世界~
言語活動 (子供)	日常生活に交流	プレゼンテーションによる学校紹介	座右の銘の紹介	夏休みの思い出の発表	プレゼンテーションによる提案	インタビューによる学校、思い出紹介	俳句の意識の交流
資質・能力 (領域別)	話す (やり取り)	話す (発表)	話す (発表)	話す (発表) 書く	読む	話す (発表 やり取り)	

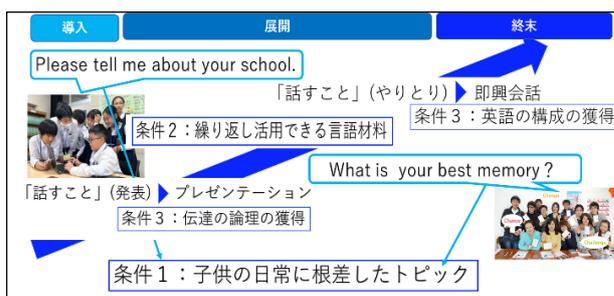
【図2 第6学年年間指導計画】

このように目的や場面、状況を明らかにして創造性を発揮することを中心としたカリキュラムを構想する(図2)。

### 2 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ豊かにする単元構成と言語活動の条件

図1で整理した見方・考え方を働かせ、豊かにするためには、領域を統合した単元構成をする。特に、小学校外国語教育においては、音声中心で外国語に慣れ親しむことを大事にしている。具体的には、領域「話すこと」における発表とやり取りを1単元の中に設定した単元構成にしていくことである。

また、見方・考え方は言語活動を通して働かせ豊かにしていく必要がある。そこで、以下のような3つの条件で言語活動を設定する。①子供の日常に根差したトピック(題材)であること、②繰り返し活用する言語材料があること、③コミュニケーション方略(伝達の論理)、談話能力(英語の構成)を活用することである(図3)。



【図3 単元構成と言語活動の関係の例 (第6学年)】

## 具体的な実践事例

### 第6学年「This is my school memories.」

#### 1 本単元における外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

本単元において重視される外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方は、「その場での会話を継続するために、伝えたい内容と英語表現に着目し、相手の理解や質問に応じて英語表現を選択したり、非言語（ジェスチャーや資料活用等のコミュニケーション方略）を用いたりしながら、やり取りすること」である。特に第6学年の単元「This is my school memories.」においては、英語で交流した経験からコミュニケーションを楽しむために、会話を継続させたいという目標を設定し、英語の構成に既習の英語表現を活用したり非言語を活用したりしながら、学校紹介や学校生活の思い出についてその場でやり取りをすることを重視した。このことは、異なる文化的背景をもつ他者を共感性をもって受容したり自己の考えを整理し伝えたりしようとする点で、主に外国語科で目指す創造性や協働性の発揮につながっていく。

#### 2 本単元で重視する学びの文脈

本単元では、「その場で質問に答えたり会話を継続したりする力を高めたい」という子供の目的に応じて、学校紹介や学校生活の思い出について伝えたい内容を英語表現（introduction, body, conclusionといった英語特有の組み立て）で再構成し、必要に応じて非言語も活用しながらやり取りを継続することができることをねらいとした。そこで、単元導入時に出合ったタイ王国の子供とのコミュニケーション経験を基に、社会的・実用的側面における学びの文脈を重視した。具体的には、まず、日本語で伝えたい内容や構成を吟味し、どのような英語で表現すると具体的なイメージを共有することができるのか等についてコミュニケーションの見通しを話し合う場を設定した。次に、英語の構成として「はじめ」に内容の大枠、「中」に具体的な説明や例え、「終わり」に伝えたい感情という3つの構成で共有した。そして、単元の終末には、コミュニケーション場面から「同じ英語なのに、相手によって捉え方が異なったことが不思議だった」という言葉への気付きから、日本語と英語、言語そのものを追究していく学問的・文化的側面へ学びの文脈をつくっていった。

#### 3 授業の実際

単元導入段階(第1時)においては、英語を用いてやり取りする力を高めたいという目標をつくり出すことをねらいとした。そのために、タイ王国の子供たちに、「附属福岡小学校を紹介する」という場を設定した(資料1)。

C1: プレゼンテーションはできたが、その後質問されたことに対して、答えられるようになりたい。

【資料1 第1時の子供の振り返り】

C1の下線に示すように、生活の中で海外の人と交流する場を設定することで、英語を用いてその場でやり取りを継続するという実用的側面から目標をもつことができた。

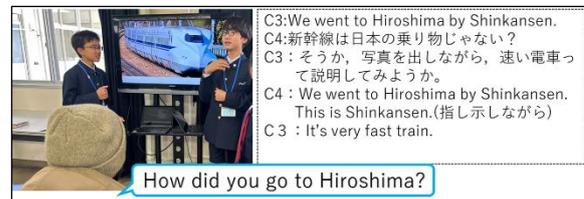
単元の展開段階前半では、その場でのやり取りを継続することができるようにするために、英語の構成を捉え、伝えたい内容について既習の英語表現を活用しながら再構成する時間を設定した(資料2)。



#### 【資料2 英語表現の再構成の過程】

この再構成における思考は日本語で行うことが重要である。それは、聞き取ったことに応じて何を伝えるのか、その場でのやり取りに必要な英語表現を見いだす際には、母語である日本語で思考する必要があるからである。

単元の展開段階後半では、再構成した伝えたい内容を活用することに加えて、資料やジェスチャー等の非言語も用いながら、想定したその場でのやり取りをこえて想定していない話題についてもコミュニケーションを継続しようとする姿の発揮をねらいとした。そのために、再度、留学生に附属福岡小学校の紹介、小学校の思い出についてやり取りをする場を設定した。そうすることで、英語の構成を活用して、単元前半に行ったプレゼンテーションの内容を再構成し、即興的なやり取りを継続する必然性を高めた。子供たちは、質問に対して、「はじめ」では伝える内容の大枠について話し、「中」では具体的な内容を付加したり、「終わり」では、感情を共有し、聞き手に問いかけたりすることで、その場でのやり取りを継続させることができた。今回の英語を用いたやり取りの中で、聞き手と意味の共有ができなかった際には、写真やイラストを提示しながらやり取りを続けようとする姿が見られた(資料3)。



#### 【資料3 写真を使いながら意味を共有しようとする姿】

#### 4 考察

「話すこと」の領域において、言語活動にプレゼンテーションとやり取りを往還させること、再構成する際に英語の構成を活用する単元構成によって、聞き手と共有できる情報が増え、その場で質問に答えたり、相手に聞き返したりしてやり取りを継続することができた。これは、留学生の質問に応じて、日常に根差したトピックについて自分の考えや気持ちを伝える創造性が発揮された姿と言える。

外国語科部 藤大航